

「心からありがとう」

一般 伊藤 恭子

「いらっしやいませ」店内に足を踏み入れると、どこの店もたいていこの声で迎えてくれる。

夏の暑い日、私はその強い陽射しに耐えかねて、サングラスを購入しようと思つた。二人でフラット眼鏡店に入った。「いらっしやいませ」いつもの声が店内に響き渡る中、私は目的の商品の所へ向かった。

「種類がたくさんあつて迷うね」「かけてみなさい。見てあげるから」。母とこんなやり取りをしながら、気になるサングラスを次々にかけては鏡を覗き込み、やつとの事で二つに絞り込んだ時には、二〇分以上経過していた。

「スミマセン」私の呼びかけに店員がやって来た。

「お決まりになりましたか？」「実は、まだ迷っていて…」そんな曖昧な私の態度に嫌な顔もせず、色々とアドバイスをし始めてくれた。さすがに母もじれったくなくなってきたらしく、「安いから二つ買えばいいじゃない」と私をせかし始める。ひとつ一五〇〇円。確かに安い。でも、私にしてみれば二つなんか必要ないし、実用性のあるシッカリした物が欲しい。店員を質問攻めにして根掘り葉掘りと聞いた後、やつとの事で決定した。

「では、こちらにどうぞ」。店員は丁寧に私を誘導して、レジ脇の椅子に腰をおろさせた。「サイズを調整しますね」。そう言うと、私にサングラスをかけて、細かに調節してくれた。こうして私のサイズに仕上がったサングラスは、ケースも付けてもらい立派な一品となった。

「ありがとうございます。不都合があつたら、小さな事でもいらして下さい」。終始心地の良い接客に、ありがとうと言いたいののはこっちの方だ。たった一五〇〇円のサングラス。でも、私にとっては大切な買い物。そういう客の気持ちをわかってくれているような、親切で嫌味のない接客態度。何か必要になったら、又、ここで買おう。知り合いにもこの店を勧めてあげよう。そんなふうに思えたのは初めてだった。

客がいても、店員同士大声で話をして笑ったり、強引に商品を薦めたり、そんな店がたくさんある中で、この店の店員に出会えたのは非常に嬉しい事だった。「本当にお世話かけました」。

私は、心の底からお礼を言い、何度かお辞儀をして店を後にした。いつもこんなに良い気分で、買い物ができるばいのに。そんな事を考えながら、強い陽射しを遮るために、買ったばかりのサングラスをケースから取り出した。